O2-046

小児慢性機能性便秘と診断された子どもの便秘が慢性化した要因とその課題

鈴木 千琴

聖路加国際大学大学院　看護学研究科　修士課程

【目的】
小児慢性機能性便秘と診断された子どもの排便習慣に影響を与えている要因を明らかにし、便秘が慢性化した背景の課題を検討する。
【方法】
2015年6月から12月に研究者が行った実習の記録を後方視的に、事例の比較・統合分析を行った質的記述的研究である。研究者の所属施設・実習施設の研究倫理審査委員会の承認を得て行った。
【結果】
対象は幼児期6例、学齢期まで症状が継続した学齢前期2例であった。便秘の症状のきっかけは、離乳食開始時期が5名と最も多かった。症状出現から適切な治療に至るまでの期間は平均約27か月と2年以上であった。地域の専門職から専門的な治療に紹介されたのは3例のみであり、5例は母親がインターネットなどを検索して、受診に至っている。子どもの排便習慣の特徴として、子どもはこれまで長期間苦痛な排便を経験してきたことにより、排便に対して恐怖心や否定的な感覚を持ち、排便を避けようと排便を我慢する行動が見られていた。排泄習慣の獲得時期でもあり、子どもは発達課題に取り組むことができず、周囲と異なる排便方法に羞恥を感じ、自宅以外での排便を我慢するようになっていた。母親は、地域の身近な専門職に相談を行っていたが、適切な支援を得ることができず、生活習慣の改善を強調されることで、育児を否定された思いを抱いていた母親もいた。偏食や「こだわりがある」などわが子に気がかりを持つ母親は、排便の問題もわが子特有の問題ととらえ、子どもへの関わりに迷いを強めていた。そのため、母親は周囲に相談をしなくなり、母親や家庭内のみで対処し、便秘が慢性化していた。また、保育所や幼稚園では排便の問題は把握されていなかった。子どもにとって身体的・心理的に苦痛がある排便に、周囲の大人が積極的に関わらない状況に陥っていた。
【考察】
地域の専門職の母子への関わりが便秘に対処する親の行動に影響を与えていた。適切な支援に辿り着けなかったことで、子どもの行動へ不安を抱くなど、その育児の迷いも強める要因となっていた。また、周囲から理解されず、親は相談を躊躇するようになり、子どもの排便の問題が顕在化されにくい状況になったと考えられる。これらのことから、健診や保育所、他の症状で受診している診療所における、便秘の慢性化の予防的な支援が重要と考えられ、その予防的な看護支援を検討していくことが課題である。

O2-047

対話と傾聴を基本とするネウボラナースからの示唆
利用者からみたネウボラナースとの関係（2）

井上 知香[1]、向井 美穂[2]、上垣内 伸子[2]

[1]常葉大学短期大学部　保育科、
[2]十文字学園女子大学　人間生活学部　幼児教育学科

【目的】
　母親が妊娠してから出産しその子どもが就学する前までの育ちをかかりつけの専門家（保健師）が母子および家族を支援する制度および場所であるネウボラはフィンランドで生み出された。かかりつけの担当者がいる、面談の回数は多くその時間も充分にとられているなどの手厚いサポートが注目されている（2015,高橋）中で、本研究では実際にフィンランドのネウボラを利用する母親の声から、ネウボラナースとの関係がどのように結ばれているのかについて考察することを目的とする。ネウボラでは主にことばを介しての面談が実施されるがその対話性に大きな意味を見出し、支援の核とされている。この対話性に注目する中で利用者が「感じ」経験しているその実際を明らかにする。
【方法】
　2015年9月にフィンランドにて妊娠初期からネウボラを利用し（現在も利用中）出産子育てを経験しているフィンランド在住の2名の母親（日本人）にインタビューを実施した。語られた内容をICレコーダーに記録し分析対象とした。データ収集と使用及び個人情報の保護については文書と口頭で説明し承諾を得ている。
【結果と考察】
　ネウボラナースとの面談においては、以下3点を利用者により感じられ経験されていることとして捉えた。
＜母親の経験＞1）具体であること　一般的な子どもの発達状態をチェックするのではなく、目の前にいるわが子の話をして育ちについて状態を確認し、ナースの手でその実際が肯定的な表現で記録し重ねられている。2）行為として応答されること　子どもが寝ないという電話相談に対し、連れてくるようにと言われ、実際に対面するなかで自分自身と子どもの様子を見てもらいライフスタイルの改善について話し合うことができた。3）結論をもらう場ではない　困った際にアドバイスはもらったものの具体的な解決には至らなかったこともある。必ずしもネウボラが子育てに対してすべての答えを出してくれる場所ではないが、話しているだけでも気が楽になった。
　一方的なネウボラナースの働きかけというものはなく、始まりは利用者の声からとなる。その声に対しことばのみならず行為を伴った応答がもたらされる。納得する解決がもたらされない可能性も了承しつつ、顔の見える専門家との応答的なつながりのなかで対話が継続され重ねられていくことを利用者は経験しているといえる。

一般演題・口演　6月25日(土)

Presented by Medical*Online